

平成 21 年度

事業所名 : グループホーム おらほの家

# 1 自己評価及び外部評価結果

## 【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	O370800211		
法人名	特定非営利法人 明成会		
事業所名	グループホームおらほの家		
所在地	〒028-0526 岩手県遠野市下組町11-49		
自己評価作成日	平成 22 年 1 月 6 日	評価結果市町村受理日	平成 22 年 3 月 31 日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	<a href="http://www2.iwate-silverz.jp/kaigosip/infomationPublic.do?JCD=0370800211&amp;SCD=720">http://www2.iwate-silverz.jp/kaigosip/infomationPublic.do?JCD=0370800211&amp;SCD=720</a>
----------	---

## 【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 いわての保健福祉支援研究会		
所在地	〒020-0021 岩手県盛岡市中央通三丁目7番30号		
訪問調査日	平成22年1月19日		

## 【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

ホームの名前のように、利用者の方たちの「おらほの家」に近付けるように家庭的な雰囲気を大切に「普通の暮らし」を常に考えながら関わりをもちたいと、取り組んでいる。敷地内には畑や花壇があり野菜作りや花を楽しむことができる。散歩をしながら地域の人と顔なじみとなり、声をかけていただいたり、自治会に加入し地域の行事に利用者、職員と一緒に参加したりと地域との関わりも積極的にもつように心がけている。最高齢102歳、平均年齢88.1歳と高齢であるが、皆さんお元気に過ごされている。

## 【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

閑静な住宅街で自然環境も良く、広い敷地を生かしての畑・花壇づくりや自家製の味噌づくり等を行ったり、通所事業も行うことで利用者間の交流の幅を広げ、生活の楽しさ・充実につなげている。地域住民との交流にも力を入れ、自治会(町内会)活動への参加による地域との交流も密になっている。住民からも介護サービスや福祉用具の相談があるほか、行政職員や警察からも協力的な関わりが得られており、地域の様々な人たちの関わりが深まっている。また家族の気持ちにも配慮した場面作りもされており、家族の感謝と協働意識に結び付いている。代表者・管理者の明るさが、職員の明るさ・生き活きた介護につながっており、利用者の穏やかな表情や自由な行動に反映されている印象を受ける。親しみやすい地域性を背景として、「普通の暮らし」を目指していく誠実な姿勢が地域、家族、そして何より利用者本人からの信頼に結び付いている事業所である。

## V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当する項目に○印
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働いている (参考項目:11,12)
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

【評価機関:特定非営利活動法人 いわての保健福祉支援研究会】

事業所名 : グループホーム おらほの家

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I. 理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	利用者の安心した生活のため、職員共通の認識で取り組めるようにミーティング等で取り上げている。理念を玄関やスタッフルームに掲示し日常に気に留めて実践できるように努めている。	職員全員で話し合いつくりあげた理念「もうひとつのわが家いっしょに暮らす豊かな日々、心安らぐ日々をサポートします」を玄関やスタッフルームに掲示しているほか、ミーティング等で話し合い、職員が方向性を共有し、ケアの実践に繋げている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	自治会活動(お祭り・班長の役割など)に利用者と一緒に参加したり、近くの保育園や学校行事に招待され出かけている。近所の人々が来所されお茶を飲んだりしている。散歩に出かけ近所の方たちに声をかけていただいている。	自治会活動(町内会)にも積極的に加わり、地区役員が変わるごとに事業所の説明をしているほか、新年会や年祝等の地区行事にはなんでも声をかけてもらっている。雑巾やシルバーカーの寄付もあり、小学生、中学生の訪問による交流もある。	日々の散歩等の日常的な場面で、見知らぬ人でも挨拶を交わせる場面で実現できている。今後も近隣との日常的な親しみをベースとした、顔の見える交流の継続を期待したい。
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	地域の方たちに運営推進会議に参加して頂いたり、ホームでの様子をたよりでお知らせしているが、十分ではないので、今後検討していきたい。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	2ヶ月に1回の会議では事業内容や利用者の様子など報告し、運営委員から意見をもらうようにしている。	委員からは積極的な参加を得ており、利用者へのサービス向上に繋がる情報を得ているほか、市町村への要望や参加者それぞれの関心事等、事業所内の話題を越えた活発な意見が出される委員会として運営されている。	地区役員や行政職員が入りながらも、意見交換は堅苦しくない雰囲気で行われていることがうかがえる。今後も参加者が伸びやかに話をできる空気作りを大事にしてもらいたい。
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者とは頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	市主催の地域ケア連絡会議に出席し、情報交換やアドバイスを貰っている。また、市職員も時々来訪するとともにホーム職員も市に行きお互い情報交換をしている。市開催の研修会に参加している。	市の担当者は運営推進会議のメンバーでもあり、地域ケア連絡会の出席、市訪問時の担当者との情報共有やアドバイスも受けている。また、市開催の権利擁護等の諸行事や研修にも参加している他、市からの依頼で緊急通報窓口も実施している。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束の弊害については、各職員感じていてケアをいろいろ工夫しているが「やむを得ない」場合の考え方や、気付かないうちに身体拘束を行っているのではと思うところもあり職員全体での勉強会を希望されている。	職員全員での身体拘束をしないケア実践に対する意識の高揚も高く、加えてケアの工夫も再確認をするなど、職員間の共有に繋げている。今後見たいには気づきにくい拘束の場面や要素がないかを振り返りたいとしている。	何かを押しつけていないか、何が自由を奪うことにつながるかなど、今後勉強会を企画し、更なるケア向上に期待したい。
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	利用者一人一人に安心して生活していただくよう接し、職員はお互いに注意をしている。職員間で話し合う機会や、研修会などに参加していきたい。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	市の研修会などで勉強する機会があり、出席者が伝講したり、以前日常生活自立支援事業を利用した方があり、職員全員で学ぶ機会をもったがむずかしく、よく理解できないとのことで学ぶ機会がほしいとの希望がある。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時、または解約時にはご家族の話を良く聞くようにし、十分に説明するようにつとめている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	家族の来訪時に意見・要望を話せるよう雰囲気づくりに努めたり、複数の家族同士が話し合える場面作りにも努めている。運営推進会議を通じて意見や要望を聞く機会をもっている。	年1回、家族が集う場を設けており、情報交換や体験談等の話し合いを実施している。家族の来訪時にもお茶を飲みながら話す場を設け、利用者や職員、さらには他利用者や家族とも話ができるよう配慮されている。	家族間の交流の視点や、過去の家族のつらさをねぎらう姿勢は素晴らしく、家族からの信頼も厚い。今後も家族と共に利用者を支え合う関係を大事にしたい。
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	ミーティングや申し送りの時などに、普段に気付いたことや、改善したいことなどをそれぞれの職員から提案してもらうようにしている。	職員から「バスマットの工夫」、「物干し竿の整備」、「勤務シフトの工夫」など、改善案や運営に関する意見・要望も出され、これらが反映されている。ミーティング時や日常的に代表者が職員から「お父さん」、所長が「お母さん」と呼ばれており、職員が上司に話し易い雰囲気がある。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	代表者は、日常的に職員と話し合う機会をもつようにつとめており、職員一人一人のがんばりを認めてくれているとおもう。また、職員もそれを感じて仕事できている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	施設内で勉強会をもったり、外部から講師を招いて研修会(介護施設にとっての接遇・救命救急)をしている。県グループホーム協会や市が開催する研修会にも参加している。勤務体制に配慮しホームヘルパー資格取得を奨励している。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	県グループホーム協会に加入し研修会などで交流できるよう配慮している。市内4ヶ所のグループホームの職員との交流会や勉強会を計画しているが今年度は実現できていない。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>Ⅱ. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居前に自宅または、施設などを訪問し利用者と面談し、本人の思いを聞くようにしている。それが無理なときは、家族の方や施設の職員から様子を聞くようにしている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入居前に、家族と面談し、思いや要望などを良く聞くようにつとめている。来訪時にも、心配なことや、不安など気軽に話せるように努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	本人や家族の話を聞いたり、関係者との情報交換をしながら必要なサービスを考えるように努めている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	利用者一人一人の得意なものや、経験をいかしてもらえよう、畑仕事や漬物づくり、味噌づくり、釜での御飯たきなどの場面づくりをし、教えていただきながら一緒に行い、ほめていただいたり、励まされたりしている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	日々の様子を来訪時や便りなどで伝え、情報を共有しながら家族の意向を大切に支援していくようにつとめている。面会時の過し方や外出など家族との時間を大切に支援するようにつとめ、安心・信頼していただけるよう努力していきたい。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	訪ねて来る人は拒まず本人が忘れていたら職員が介入し名前を教えたりしながら会話を取り持つ等の支援をしている。積極的な支援はできていない。	事業所として、利用者の関係者(友人・親戚・近所の知り合い)が訪問し易い雰囲気になっており、また、利用者の外出希望についても、利用者・家族両方の意向を大切に受けとめるように努めている。	生家を訪ねたい等の本人の希望に沿うためには、より家族の理解が必要と感じることもある。実現することでどれだけ本人が喜ぶか等、家族の理解を深める工夫が今後期待される。
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	仲の良い人同士など職員は把握し、ひとつの事を一緒にしていただいたり、レク活動や入浴などの声がけをしてもらったり手伝ってもらうこともある。利用者同士のトラブル回避の為職員間で情報交換で早めの対応を心がけている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	契約終了時は相談があればいつでも話しているが他施設に移った方々との付き合いは少ない。自宅に帰られた方々とは、近況を聞いたりしながらお付き合いしていただいている。		
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	日常生活の中での会話や表情から本人の希望や意向を把握するように努め、可能な限り実現できるように努めている。職員間で本人の思いにそえるように話し合い支援するようにしている。	夕方、不安になる時間帯や体調の具合などを細やかに観察しており、本人の希望や意向をくみ取るよう、「声掛け・言葉づかい」にも配慮が見られた。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入所時に本人、家族からの聞き取りや、普段の会話などから情報を得るようにし、家庭での生活に近づけるように支援しているが、十分でなくアセスメントの充実が課題である。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	規制は無く自由に過ごしていただいているが、食事、睡眠、排泄には注意深い観察に努め生活リズムを整えるように支援している。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	本人や家族と話し合い、また職員はケアについて交替で評価し、ミーティングで課題について話し合い意見やアイデアを出し合い計画作成に活かすようにしている。	介護計画の作成は、職員全員のミーティングで意見交換により計画・見直しされ、反映されている。また、家族に食事づくりに参加してもらい、食事の内容・工夫状況を直接見てもらい、改善に繋げている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	出来るだけ表情や言葉なども記録し情報を共有しやすいように努めているが、見直しに活かしていくには記録の仕方の検討が必要である。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	かかりつけ医への受診は原則としては家族にお願いしているが、急変時や本人、家族の要望により通院の付き添いや、買い物など外出時の付き添いは可能なかぎり対応するようにしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	運営推進会議に民生委員や交番の方にも出席してもらい連携がとれるようにしている。保育園や学校行事への参加など、本人の希望で参加している。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	入所前からの主治医との関係が継続できるように支援している。主治医を変更する場合は紹介状をもらいスムーズな治療が受けられるようにしている。	主治医との関係でも、診察や治療は本人・家族の意向を大切に、できる限り通院は家族が付き添い、本人・家族が安心して受診できる仕組みにしている。また日常の健康管理の把握にも努め、家族との情報の共有に努めている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	管理者が看護職を兼務しているので、申し送り等で常に健康状態が把握できている。不在のときや夜間も連絡が取れる体制をとり体調不良時に対応できるようにしている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院した場合は担当医や看護師から病状についての説明を受けながら情報交換をし早期退院にむけた取り組みに努めている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	重度化した場合は、家族と話し合いながら出来るだけの支援をしていきたいが、事業所が対応できる支援など職員間で共有できるように話し合いが必要である。	今まで終末期を迎えた利用者はなく、また本人や家族からの要望も出されてはいない。ミーティング時などで利用者の状況を職員間で共有、家族との連携を密にし、支援体制づくりに努めている。事業所では困難な医療面での対応を今後の課題として捉えている。	必要な協力が得られる医療機関との連携に関して、長期的な視野での検討が期待される。家族との継続的な話し合いや運営推進会議での検討の他、同地区の事業者同士での方法模索も有効と思われる。
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	心配蘇生法やAEDの研修は受けている。実際にと考えると不安に感じている職員もいるので今後も研修の機会をもっていきたい。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	避難訓練は年2回以上計画している。夜間を想定した訓練も取り入れているが、近隣の人達に参加して貰っての訓練は無い。区長さんや民生委員の方には駆けつけてもらえるようお願いしている。	全員参加による避難訓練を年2回実施、昼間帯ばかりでなく、夜間帯を想定した訓練も実施している。また、運営推進会議などを通じて、区長、近隣住民、民生委員の方々の緊急時の協力が得られるようにしている。	近隣世帯との関係も良好なため、今後は近隣住民にも参加を依頼しての訓練実施が期待される。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	部屋に入るときはノックや声をかけるよう注意し、トイレや歯磨き、入浴等への誘導は言動や表情に注意しながらさりげなく行うようにしている。	職員ミーティング等で、利用者への「声掛け・誘導方法・利用者の観察・言動」等について、常に「気づき点」や「注意点」を話題にし、職員同士の共有に努めている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	ゆったりと出来る小さいグループや皆でわいわい話せる機会を作るなどし、思いを表せるように努めている。自分で決められるように一人一人に合わせて説明するように努めている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	利用者のその日の様子や希望に沿うように支援している。食事時間や場所、日中の過ごし方なども本人の希望にあわせるようにしている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	起床時や外出の際などは、洋服を選んでもらうように働きかけたり、整髪が自分で出来なくなった方には同じスタイルが継続できるよう支援するなど個々にあわせるよう努めている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	利用者と一緒に買い物、準備、後方付けをし得意な分野で頑張れる様に支援している。畑で作った野菜と一緒に調理したり味付けを教えて貰ったりし、職員と一緒に食事を取り楽しく食事がとれるようにしている。	利用者と一緒に食事の買い物・料理作り・食事後の食器洗い・後片付け、野菜作りなど、一人ひとりが好み・能力を反映できる配慮がされている。屋外で利用者が手伝いながら薪と釜でご飯を炊いた時は好評であった。	副食をより充実してもらえるとうれしいといった声もある。個々の要望は様々であり全てへの対応は困難と思われるが、可能な範囲での工夫を期待したい。
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	利用者の水分や食事の摂取量などを記録し職員が情報を共有して、不足がないように支援している。個々の状態に合わせて調理方法も工夫している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	個々に合わせさりげない声かけや見守りをして、毎食後うがいや義歯洗浄を行っている。ブラッシングやマッサージなどのケアもとりいれていきたい。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	利用者の行動などを観察しながら、誘導したり時間での声がけをしている。日中は布パンツを使用するようになった利用者もいる。	利用者一人ひとりの時間帯や習慣を把握し、トイレ誘導に取り組んだ結果、リハビリパンツから布製パンツとパットに改善されている。具体的には、一人ひとりの動作や様子を全職員が把握し、声かけの機会を増やし、取り組んでいる。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	毎日の食事量と適度な運動、水分摂取が出来るよう支援している。カスピ海ヨーグルトやブルーベリーなど取り組んでみている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々に合わせた支援をしている	希望により20時頃まで入浴出来るように支援している。入浴を好まない利用者には、他の利用者に誘って貰うなどして楽しめるように努めている。	20時までの入浴時間にしており、寝る前に入る利用者もいる。入浴日・入浴時間帯等の希望は、利用者に柔軟に対応できるようにしている。また、一人ひとりに合った個別の入浴支援、気の合った者同士の入浴等、心が安定して就眠できる配慮がされている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	談話室にコタツやソファを用意してくつろいで過ごせるようにしている。日中はレク活動や散歩に参加していただき夜は安眠出来るように生活リズムを整えることを大事にしている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	個別のケースに服薬情報を添付し変化の場合にはいつでもみれるようにしている。申し送りやミーティングで情報を確認し、症状の観察に努めている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	料理作りや食器ふき、掃除、洗濯物たたみ、縫い物など利用者の出来ることを活かせるように努めている。散歩、ドライブ、花見、祭り見物、歌をうたったりなど楽しめるように支援している。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	天候や利用者の気分に応じて散歩や、ドライブに出かけている。美容院や買い物などへの付き添いを行っている。近くの神社のお祭りや遠野祭りの見学には、席を用意してもらうなど協力を得ている。	天気の良い日の周辺散歩や車両を利用してのドライブによる散策など、自然との触れ合いや、周辺祭りの見学、町との触れ合いによる癒し・生活感を得られるよう支援している。また通所利用者も一緒に外出しているほか、仲の良い利用者は送迎に同行もしている。	



自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	家族の希望に配慮した支援を行っている。買い物に同行し見守りなど必要に応じて支援している。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	母の日や特別な日の贈り物へのお礼の電話や年賀状の返信など希望があった場合はいつでも対応することをつたえ、こえをかけている。FAXでやり取りしている方には、代筆や送信など支援しながら継続できるようにしている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	花や置物、絵などを飾りまた、日当たりの良い場所には畳を敷き昼寝をしたりゆったり過ごせる様にしている。昔懐かしいものや季節感をもっととりいれるよう工夫していきたい。	居間の窓際にベランダが増設され、日当たりが良く、居心地の良い場所になっている。春夏秋冬の季節感を感じられ、心安らぐ場となっている。屋外の敷地も広く、花壇や畑として活用されているほか、地域活動にも提供できないか検討されている。	花壇は利用者個々に用意され、咲いた花を利用者同士で自慢し合ったりといった喜びにつながるなど、広大なスペースがユニークに活用されている。今後も、地域住民も含めて共有スペースを柔軟に活かしていくアイデアを検討していただきたい。
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	共有空間にソファやこたつを置き利用者が自由に過ごせるように工夫している。友達同士で話されたり新聞を読んで過ごされているが、独りでいても安心できる空間作りは、もっと工夫が必要である。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのもをを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	入所時に使い慣れた物や家具などを持参して貰うようお願いしている。位牌や家族の写真などを持参し自宅にいるときの雰囲気でも暮らしていただいているが、物がある事で混乱する事もあるのでその都度家族と相談し対応している。	利用者が使用していた馴染みの家具が、それぞれの各部屋に置かれており、電話、位牌などを部屋に置いている利用者もあり、利用者が居心地よく過ごせる工夫がされている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	段差が無く移動しやすくなっている。必要に応じて手すりを設置した。長い廊下は利用者のリハビリに使われている。居室の前に表札や好みで暖簾をつけている。		